現代日本語における「満足に」と「まともに」に関する考察

尚　暁歓

キーワード：基準、副詞的表現、否定、主観性

要　旨

本稿では現代日本語の「満足に」「まともに」の意味と用法について考察する。まず、意味については、「満足に」は「事態が主体の望んでいる基準に達している」という意味、「まともに」は①「真正面から、直接に」、②「事態が一般的に考えられている基準に達している」という意味を表す。「まともに」が意味②を表す場合、「満足に」と共に基準に対する（非）達成を表す副詞的な表現として捉えることができる。次に、用法について、「満足に」は、1)動詞述語と形容詞「ない」と共起する。2)弱い否定極性を持つ。3)取り立て助詞と共に使用することが多い。4)命令・勧誘・意志などの叙法と共起しないといった特徴を持つ。一方、意味②を表す場合の「まともに」は、1)主に動詞述語と共起する。2)明確な極性を持たない。3)命令・勧誘・意志などの叙法と共起するといった特徴を持つ。また、叙法に対する共起制限に見られる「満足に」と「まともに」の違いはそれぞれの持つ基準の主観性の度合いの相違から説明した。

1. はじめに

本稿は、現代日本語における基準に対する（非）達成を表す副詞的表現として「満足に」と「まともに」を取り上げ、その意味と用法について検討する。基準に対する（非）達成を表す副詞的表現とは、ある事態について、主体が何らかの基準を持ち、

当該事態の内容がその基準に達しているかどうかを意味する副詞的表現のことである。「十分に」「思うほど」「それほど」「ろくに」などが挙げられる。

現代において、「満足に」と「まともに」は次のように使用されるが、その意味と用法について検討する研究は管見の限り見当たらない。

(1)　地面に届く日の光を遮れば、雑草の種や芽が満足に生育できません[1]。
（『神戸新聞　夕刊』2003/6/27）

(2) a. その冷たい青い光はこのテラスを照らし、まともに顔に当たっているため目を覚ます。（今井通子『私の北壁　マッターホルン』）

b. PC を始めて間もないので、まともに URL を貼れなく、もどかしいです。
（Yahoo!知恵袋）

「満足に」と「まともに」について考察が少ないことは両者の位置づけが明確でないことと関係していると考えられる。本稿ではコーパスから検索した用例に基づいて「満足に」と「まともに」の意味と用法を考察し、お互いの共通点と相違点を分析する。その上、「満足に」と「まともに」（の一部）は基準に対する（非）達成を表す副詞的表現として捉えられるということを述べる。

以下、第 2 節では「満足に」の意味と用法について、第 3 節では「まともに」の意味と用法について考察する。第 4 節では両者の共通点と相違点について検討し、それぞれの意味と振る舞いとの関係を分析する。第 5 節はまとめである。

2. 「満足に」に関する考察

2.1 「満足に」の意味

まず、「満足に」の意味について検討する。前述したように、「満足に」を論じる研究はあまりないため、ここでは辞書の記述を概観する。『日本国語大辞典』（第二版）の「まんぞく」という項目は以下のように述べる。

[1] 本稿では、例文の末尾に出典を示すが、出典がないものは筆者による作例である。文法性判断において本稿で用いる記号「?」「??」「*」はこの順に「不自然」「かなり不自然」「非文」を意味し、文が自然な場合は記号を付さない。なお、例文に付された下線は全て筆者によるものである。

(3) ① 希望が満ち足りて不平がなくなること。また、そのさま。
② 十分であると感じること。完全または、無欠であること。欠けるところがないこと。また、そのさま。
③ 定員が充足すること。
④ 数学で、ある対象が与えられた条件にかなっていること。ある数が、与えられた方程式や不等式の解であること。

(3)のように、『日本国語大辞典』（第二版）は「まんぞく」の意味を 4 つに分けている。この記述は③を除いて、『広辞苑』（第七版）、『大辞林』（第四版）、『明鏡国語辞典』（第三版）、『新明解国語辞典』（第八版）と類似する内容となる。③については、中世（『大会日記』永正八年）の例文 1 例しか挙げられていない。また④は特定分野に使用される場合の意味である。すると、現代語における「満足に」の意味は①と②のどちらかになると考えられる。

意味規定の仕方から見ると、①は主体の感情、心的あり方に向け、②は事態のあり方に向けている、というように異なるが、対象が「無欠、完全、欠けるところがないの」であれば、主体は気分が良く、心が満たされるという状態に結びつきやすいであろう。実際の使用において、「満足に」は意味①と意味②のどちらを表しているのかはっきりと区別することは必ずしもできるわけではない。

(4) 小学校も<u>満足に</u>出ていないもくしょうが
（山本周五郎『青べか物語』）

(5) どちらにしても不自由な身体になってしまった。たとえ完治しても<u>満足に</u>歩けまい。（石垣用喜『石垣島失踪事件』）

『日本国語大辞典』（第二版）は意味②の例として(4)を挙げるが、書き手は主人公のもくしょうが小学校に通うことを望んでいる、或いはそのことが望ましいと思っているという①に近い意味合いも観察されなくもない。(5)は事態のあり方と主体の感情両方含めているといえる。さらに、より重要なのは、「満足に」の意味を考える際、主体の感情的側面と事態のあり方の側面を区別することが必ずしも用法上の相違につながらないことである。

そのため、本稿においては、(3)に示した①と②を積極的に区別することをせず、「満足に」の意味を次のように規定する。

(6)　「満足に」の意味
事態が、主体の望んでいる基準に達している

ここの主体は、発話者や文の書き手である場合や不特定の人間である場合もある。この意味規定から、「満足に」は事態が主体の持つ基準に達成しているかどうかを表す表現であるということが分かる。

2.2 「満足に」の使用上の特徴

次に、「満足に」は具体的にはどのように使用されているかを考察する。

2.2.1 調査

本稿では現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）から、キーを「マンゾク」、キーから 1 語を「に」と設定して検索を行った。その結果、287 件の用例を得られた。この 287 例について、対象外と判断する 87 例を除外し、残りの 200 例を分析用のデータとする[2]。この 200 例を、共起先の品詞の種類、動詞を修飾する場合の動詞の語形によって整理したのは次の表 1 と表 2 である。各カテゴリーの用例の比率については、小数点以下は四捨五入で処理している。

[2] 具体的には、形態上は「満足に」となっているが、その前接要素と一体化し全体でまとまった意味を表す場合((ⅰ))、「満足」が名詞として使用される場合((ⅱ))、「満足に思う」のような動詞「思う」が後接する場合を除外している。

(ⅰ)　野良猫にエサをやる人の心理が理解できません。ただの自己満足にしか見えません。（Yahoo!知恵袋）

(ⅱ)　これは直接的な経済的メリットではないが、人間はいつも生きていくための最大の目標を心の満足におく。（鈴木健二『気配りのすすめ』）

表 1　共起先の品詞別出現数

品詞	用例数	比率
動詞	192	96%
形容詞（ない）	8	4%
合計	200	100%

表 2　共起先の動詞の語形[3]

語形	用例数	比率
可能形	136	71%
基本形	43	22%
テイル形	13	7%
合計	192	100%

表 1 と表 2 から、「満足に」は主として動詞と共起し、形容詞は非存在を表す「ない」のみである。動詞の語形は、前掲した(5)のように、可能形の場合が一番多く、全体の 7 割以上を占める、ということが分かる。修飾先の動詞は可能形を取ることが多いことは「満足に」においては特徴的であるといえる。

なお、「満足に」は動作動詞、特に主体の意志的な動作を表す動詞と頻繁に共起している。以下、表 3 は用例数の多い順に「満足に」と共起する動詞の上位 20 語をまとめた。

表 3　「満足に」と共起する動詞の上位 20 語（括弧内は用例数）

歩く (7)	食べる (5)	食事をとる (5)	話す (5)	動く (4)
知る (4)	行く (3)	答える (3)	読み書きをする (3)	出る (3)
飲む (3)	走る (3)	与える (3)	ある (2)	言う (2)
息をする (2)	受ける (2)	得る (2)	会話をする (2)	買う (2)

表 3 において、「動く」「行く」（「形が満足に行かなかった」など）「ある」「得る」「出る」（「声が出る」など）の5語はモノの動きやモノの出現、変化や状態を表すが、それ以外は意志的な動作を表す動詞である。実際、「満足に」が共起する動詞の中、変化や状態など主体の意志と関係が薄い動詞と共起する場合が僅か 22 例で残りの 178 例は主体の意志的な動作を表す場合である。

[3] 「できていない」のような可能形とテイル形両方の形を取る場合は可能形にカウントする。「変化させることができない」や「整形されていない」のような場合はそれぞれ可能形、テイル形にカウントしている。

このように、BCCWJでの調査を通して、1)「満足に」は主として動詞と共起し、形容詞は非存在を表す「ない」のみである、2)「満足に」と共起する動詞は主体の意志的な動作を表す動詞が多い、3)「満足に」と共起する動詞は可能形を取る場合が多いということが明らかになった。

以下、述部の認め方（肯否）、とりたて助詞の使用、修飾内容の3点から「満足に」の使用上の特徴をさらに考察する。

2.2.2 述部の認め方（肯否）

第一に、「満足に」と共起する述部の認め方（肯否）について検討する。「満足に」が共起する述部は否定辞「ない」を伴う場合が圧倒的に多い（200例中184例）。次のような場合である。

(7)　どちらにしても不自由な身体になってしまった。たとえ完治しても満足に歩けまい。　(=(5))

また、述部の動詞が否定辞「ない」を取っていないが、文全体が否定的な意味を表す場合がある。「満足に」はこのような場合にも現れる。(8)は「満足にやって退ける」ことがとても難しい、不可能に近いということである。

(8)　ましてや、「斬り込み」というようなことは、博奕打ちでも一生に一度か二度の命の賽を振る仕事だ、十のうち九つまでは生きて帰らぬ覚悟、満足にやって退けたのにしても、今度はお手の十手というやつがあるので、その場から土地を売って二年三年と、しがない旅人で送らなければならない。
（吉川英治『坂東侠客陣』　引用者による表記改変あり）

なお、明確に否定的な意味を表すに至らず、事態が不定（定かでない）であるという文脈でも「満足に」は用いられる。

(9)　いや、角サンが“細井の奴、満足にメシ食ってるのかなあ”って何回も言うんだ。　（早坂茂三『男たちの履歴書 いかにして道を拓くか』）

さらに、以下の 2 例は「満足に」が肯定文で用いられる場合である。「満足に」は「一層」と「ほぼ」によって程度修飾されている。

(10) 日本は幸いそういう余裕があったので、兵隊なども一層満足に戦いができたものであろうと思います。
（中山吉弘『海軍大尉中山忠三郎　熱きバトルのはて』）

(11) ともかくアメリカで好意的に受けいれられたため、その後ソ連以外ではほぼ満足に実施された。（河竹登志夫『比較演劇学　続々』）

以上の各場合における「満足に」の使用状況を表 4 に示す。

表 4　「満足に」と共起する述部の肯否[45]

「満足に」と共起する述部	用例数
否定辞「ない」を伴う場合	184
否定的な意味を表す場合	7
不定を表す場合	6
肯定である場合	2

否定辞「ない」を伴う場合と否定的な意味を表す場合は、事態が否定されているため、肯定の場合と対立する。述部が意味的に不定を表す場合は肯定と否定の中間にある。表 4 から、「満足に」は基本的には否定的な環境で使用され、肯定文に現れることが極めて少ないということが分かる。「満足に」は、述語が否定辞「ない」を伴う明示的な否定文でしか生起しないというような強い否定極性を持つに至ってはいないが、やはり否定極性を持つといえる。

[4] 次の 1 例は述語が不定を表すか肯定を表すか判断に迷うため、表 4 にカウントしていない。

(iii) 博士は学者だから、からだが満足にそろっていたときでも、書物を読んだり、考えたりすることが、博士にとっては生活だ。博士は、いまは首だけになってしまったが、あいかわらず、頭脳を活動させて科学の研究を続けているので、まえとおなじ生活をつづけているようなものだった。
（アレクサンドル・ベリヤーエフ作/馬上義太郎訳/琴月綾絵『生きている首』）

[5] 述部が非存在を表す「ない」である用例は否定辞「ない」を伴う場合にカウントしている。

2.2.3 「満足に」ととりたて助詞

第二に、「満足に」ととりたて助詞の関係について検討する。「満足に」は極限を表すとりたて助詞「も」「さえ」「すら」（日本語記述文法研究会編 2009:87）と共に使用されることが多い。200 例の中、97 例が「も」「さえ」「すら」と共に用いられている。

(12)　その当時だからね、食べ物も満足になかったし、物もそんなになかったんですよ。（青木慧『ゴミ　ルポルタージュ』）

(13)　それでも、月に五千円の児童手当と三万円弱の児童扶養手当だけでは、保育料すら満足に払えない。（安東能明『15 秒』）

(14)　それにしても、私のあのときの対応の仕方は粋ではなかった。うまく断ることもできなかったし、お礼さえ満足に言わなかった。（小林光恵『ぼけナース　新米看護婦』）

なお、極限的な意味を表す「挨拶ひとつ」「何一つ」などの表現も「満足に」と共に使用される場合が 5 例観察されている。

(15)　最近の新入社員は、大学をでていても、あいさつひとつ満足にできない。（門昌央と人生の達人研究会編『ワルの知恵本』）

(16)　まったく何一つ満足にできねえ野郎だ。（田中芳樹『バルト海の復讐』）

極限を表すとりたて助詞は、「文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を暗示」する（日本語記述文法研究会編 2009:87）。「満足に」が「も」「さえ」「すら」と共に使用されると、発話された事態だけでなく、その他の事態も満足な状態にないという意味が表される。

上記(12)は「食べ物も満足になかった」に続いた文から分かるように、当時は何でも満足になかったということを示している。(13)は五千円の児童手当と三万円弱の児童扶養手当では保育料という最も基本的な支出もカバーできないということを表現することを通して、これくらいの金では育児全体がとても満足に出来ないということを伝えている。(14)もお礼だけでなく当時の対応全体が満足的ではないという意味である。

極限的な意味を表す「挨拶一つ」や「何一つ」などが「満足に」と共に使用される場合も同様に説明できる。(15)は新入社員が挨拶だけでなく、他のことも満足に出来ないということを表す。(16)も「何一つ」を通して相手の全てを否定している。

「満足に」が使用される文においては極限を表すとりたて助詞や「挨拶一つ」のような極限的な意味を表す表現が頻繁に現れる（200 例中 102 例）ことは、「満足に」は発話された事態にだけでなく、同類の事態全体が望ましい状態にないという文脈で用いられやすいということを示している。

2.2.4 「満足に」の修飾内容

第三に、「満足に」の修飾内容について検討する。「満足に」は具体的に何を修飾しうるか、「満足に」は事態をどのように修飾するかという 2 つに分けて述べていく。

まず、「満足に」は具体的にモノの存在、動作、変化や状態を修飾することがある。(17)から(20)は「満足に」がそれぞれモノの存在、動作、変化や状態を修飾する場合である。

(17) マザーの施設は全て寄付で賄われているので、病人を収容するとはいっても<u>満足に</u>薬もない。
（ひのもと由利子『インド　やっぱりノープロブレムへの旅』）

(18) a. それにしても、私のあのときの対応の仕方は粋ではなかった。うまく断ることもできなかったし、お礼さえも<u>満足に</u>言わなかった。 (=(14))

b. 三寮の佐藤武雄は小学校も<u>満足に</u>行ってないのに元陸軍大尉だという、大ボラ吹きだ。 （松本正嘉『わが戦後私記』）

(19) 地面に届く日の光を遮れば、雑草の種や芽は<u>満足に</u>生育できません。
(=(1))

(20) （引用者注：パンは）焼きムラ、形とも<u>満足に</u>いなかったけど、まあこれくらい焼ければいいかな? （Yahoo!ブログ）

(17)はモノの存在量、(18a)は動作量（「言う」という動作の量）、(18b)は動作の回数、(19)は「生育する」という自然変化の結果、(20)は状態（焼いた結果）がそれぞれ主体の満足に思われるような基準に達していないということを表す。

(18ab)はそれぞれ動作の量や回数が修飾されるが、「満足に」が動作動詞と共起する場合、必ずしも動作の量や回数を修飾するとは限らない。

(21)　ヒカルはこの四百 cc さえ満足に扱えない。時速百八十キロはおろか、交通の流れに乗って六十キロもだすと肩がカチカチに硬直してしまうのに、理不尽な規制に対して強い不満をもっている。　（花村萬月『風転　上』）

(21)はヒカルが四百 cc のオートバイを自由自在に扱うことができないということを表す。「扱う」は動作動詞であるが、この場合、「満足に」が修飾しているのは動作「扱う」の量でも回数でもなく、どのように扱うかという動作の行われ方である。この四百 cc のオートバイの扱い方が満足的でないということである。

なお、上記(20)のように、「満足に」が状態を修飾する場合、当該状態は普通、主体の何らかの動作によってもたらされたものである。(20)はパンを焼いた結果、その形が望んでいるようにならなかったことである。モノの性質など恒常的な状態については「満足に」で修飾されることが難しい。以下(22)は不自然である。

(22)　*このコップは金属製なので、満足に壊れない。

次に、「満足に」は事態をどのように修飾するかについて、「満足に」が否定文で用いられる場合を検討する。「満足に」が否定文で使用される際、文は事態の内容が主体の望んでいる基準に達していないという意味を表す。この場合、基本的には事態は既に生起しており、事態の内容がゼロではない。

(23)　容疑者は昨年八月ごろから、長女の■■ちゃんに満足に食事を与えずに衰弱させて肺炎を発症させた。　（読売新聞社『読売新聞　朝刊』2004/5/27）

(24)　外に出ると、砂が顔にあたる。満足に息ができない。
（井原俊一『日本の美林』）

(23)は容疑者が長女に与えた食事の回数や量が、食欲が満たされると思われるくらいに達していないことであり、(24)は息をしているが身体に異常を感じないようにはで

きていないということである。長女に全く食事を与えない、息が全くできないということではない。

但し、以下のように、事態がまだ生起せず、その内容がゼロである場合も、「満足に」が使用されることがある。

(25) それで引っ越しそばの代わりに七十円のラーメンをとったんです。満足にテーブルもないので、拾ってきたミカン箱をテーブルにして、掃除したばかりの濡れた床にしゃがんで彼らがラーメンを食べているところを見ていたら、突然ラーメンが嫌いになってしまった（笑）。

（宇田川悟『ニッポン食いしんぼ列伝』）

(26) 清掃も終わり、床はワックスもかかってピカピカ。思わずつま先で歩きたくなる心境だ。神棚も清掃が終わり榊も生き生きと社の前を彩っている。小さな重ね餅も備え、似合った葉付きみかんをその上に載せるといよいよお正月のにおいがする。気付けば今日は満足にコーヒーも飲まなかった。

（Yahoo!ブログ）

(25)は引っ越ししたばかりでテーブルがまだないということを、(26)はまだコーヒーを飲んでいないことを、「満足に」がそれぞれ修飾している。テーブルの量が少ない、コーヒーを望んでいたあり方で飲んでいない（或いは飲んだ量が少ない）という意味ではない。これらの場合、モノが存在していないこと、或いは事態が発生していないことが満足的ではないという意味になる。

このように、「満足に」は既に存在し発生した事態についても、まだ存在せず、或いは発生していない事態についても修飾することができる。前者の場合、事態の内容が主体の望んでいる基準にないという意味を表す。後者の場合、存在しない、或いは発生していない事態に対して、それが満足的ではなく事態の生起を期待しているという意味を表す。

以上、「満足に」について、辞書の説明を踏まえてその意味を規定し、共起先の述語の実態、否定極性、とりたて助詞との併用、具体的な修飾の仕方といった点からその用法を考察した。

以下、第3節では「まともに」の意味と用法について考察する。

3. 「まともに」に関する考察

3.1 「まともに」の意味

『日本国語大辞典』（第二版）の「まとも」の項では次の説明がなされる。

(27) ①正しく向かっていること。しょうめん、ましょうめん。
②まっすぐなこと。正道にあること。まじめなこと。ちゃんとしていること。また、そのさま。

『広辞苑』（第七版）、『大辞林』（第四版）、『明鏡国語辞典』（第三版）など他の主要辞書も(27)と概ね同様な記述をしている。意味②について、『日本国語大辞典』（第二版）は基本的に他の副詞を以て説明するという記述の仕方であるが、『新明解国語辞典　第八版』は次のように述べる。

(28) 社会通念から見て、そうあるべきだと考えられる条件を満たしていて、世間に後ろめたさを感じる点が全く認められない様子だ。

つまり、「正道にある」や「まじめ」「ちゃんと」と解釈される場合の「まとも」は実際、社会通念で考えられている条件や基準を満たしているということを表している。(28)後半の説明である「世間に後ろめたさを感じる点が全く認められない」ことは「社会通念から見て、そうあるべきだと考えられる条件を満たしている」ことの結果であり、「まとも」の意味を考える時、前半の説明がより重要であると思われる。

「まともに」の意味についても、基本的には(27)と(28)の説明が当てはまる。「まともに」はモノの物理的な位置関係を表す場合と、社会の一般的な通念で考えられている基準を満たすという意味を表す場合がある。以下の(29)と(30)である。

(29) 砲弾にまともにあたって死を免れる人間はほとんどいない。
（ロイ・アドキンズ著/山本史郎訳『トラファイルガル海戦物語』）

(30) もちろん、こんな珍説をまともに取り上げる研究者はいませんが、芭蕉の素性がよくわからないためいろいろ取りざたされるのです。
（竹内均編『頭にやさしい雑学読本』）

なお、以下のような場合、「まともに」は「ましょうめん」という物理的に相対するという意味というより、話し手が一時逃れの言葉を話した後、相手が直ぐ聞き返した、すなわち時間的に間隔を置かないという意味、或いは遠回し的な言い方をせず直接に聞き返したという意味として捉えるほうが適切だと思われる。(31)のような場合は、物理的な位置関係という意味から発生した場合と考えられる[6]。

(31) まともに聞き返されると、もともと一時逃れの言葉だけに、ますます答えようがない。 (渡辺淳一『愛のごとく 上』)

そのため、本稿では前述した各辞書の説明を踏まえて、「まともに」の意味を次のように規定する。

(32) 「まともに」の意味
a. 真正面から、直接に
b. 事態が、一般的に考えられている基準に達している

「まともに」が(32b)の意味を表す場合は、本稿が最初に述べた、主体の持つ基準に達成しているかどうかを表す副詞的表現として捉えることができる。以下、「まともに」の使用上の特徴を考察する際にも主として(32b)意味を表す場合を扱うことにする。

3.2 「まともに」の使用上の特徴

続いて、「まともに」は具体的にどのように使用されているかについて考察する。「満足に」の場合と同様、「まともに」についても BCCWJ から、キーを「マトモ」、キーから 1 語を「に」に設定し用例検索を行った。検索した用例は「まともに」が(32a)と(32b)のどちらを表すかによって分類し、(32b)の意味を表す場合をこの節の考察用のデータとする[7]。以下は共起する述語、述部の認め方と叙法という順から「まともに」の使用上の特徴を見ていく。

[6] この場合の「まともに」に関して『明鏡国語辞典』(第三版)には「駆け引きをしないこと」という説明がある。
[7] 「まともに」は(26a)と(26b)両方とも捉えられるような場合も本節の考察対象としている。

3.2.1 「まともに」と共起する述語

まず、「まともに」と共起する述語について検討する。「まともに」は主として動詞述語と共起し、特に主体の意志的な動作を表す動詞が多く出現している。「まともに」の用例 364 例の中、述部の動詞が主体の意志的な動作を表す場合が 322 例、モノの動きや変化など主体の意志と関係が薄い動詞が 41 例である。これは第 2.2.1 節で述べた「満足に」の場合と同じ傾向を見せている。表 5 は「まともに」と共起する動詞の上位 20 語を示している。括弧内は BCCWJ での用例数である。

表 5　「まともに」と共起する動詞の上位 20 語[8]

聞く (16)	答える (13)	動く (12)	考える (12)	取り合う (11)
話す (11)	走る (10)	働く (8)	やる (8)	受け止める (7)
する (6)	会話をする(5)	生きる (5)	議論する (5)	付き合う (5)
取り上げる (5)	口をきく (4)	食べる (4)	使う (4)	取る (4)

但し、「満足に」の場合と違い、「まともに」は非存在を表す「ない」と共起することがあまりない。今回の調査で唯一検索できたのは以下の 1 例のみである。

(33)　2 年間、週 4 日、夏期講習も冬期講習、春期講習と、去年十一月末まで休みがまともになかった息子。　（Yahoo!ブログ）

(33)は出来事の非存在を表し、「休みがまともになかった」は「まともに休まなかった」に近い。「まともに」は主として動きを修飾し、モノの存在量を修飾することは基本的にないだろう[9]。

3.2.2 述部の認め方（肯否）と叙法

[8] 共起先は「話をする」となる場合は「話す」の例として、共起先が「会話する」「会話を交わす」となる場合は「会話をする」の例として数えている。

[9] 「基本的にない」と表現したのは、「食べ物もまともにない」というような言い方は筆者には言えなくもないと感じるにもかかわらず、BCCWJ ではそのような用例がないからである。

次に、「まともに」が使用される場合の述部の認め方（肯否）と叙法について検討する。肯定・否定といった認め方は叙法に含まれるという見方もあるが、ここでは認め方と叙法を分けて見ることにする。

述部の認め方（肯否）について、「まとも」は「打ち消しや否定の表現を伴うことが多い」（飛田・浅田 1991）と指摘されるように、「まともに」も否定的環境で使用されることが顕著に観察される。(34)においては共起先の述部が否定辞「ない」を伴っている。(35)は後続する「労力の無駄」から，文が「まともに話せない」という否定的な意味を表しているということが分かる。

(34) 1年以上サッカーをまともにやってないにしても、体力には自信があったんです。（Yahoo!ブログ）

(35) 船長のふざけた紹介に、レイアートがすごくいやな顔をする。が、文句はいわなかった。もうナーヴ船長とまともに話すのは労力の無駄だと判断した様子だった。（若木未生『メタルバード』）

また、事態の発生にはかなりの労力が要り、或いは極めて稀である、または事態の発生が望ましくないといった場合でも「まともに」が使用される。こういった文脈においては、話し手が事態を否定的に捉えていると考えられる。

(36) 要するに、イタリアの郵便がそれなりにまだまともに動いているのは、一年のうち非常に限られた期間であるわけだ。（村上春樹『遠い太鼓』）

(37) こんな話をまともに聞くアホウなんざいやしないさ。（藤原伊織『ひまわりの祝祭』）

なお、「まともに」は事態の真偽が不定であることを表す疑問文や肯定文でも使われる。

(38) “隠し部屋”だなんて、いかにも探偵小説趣味の問題で、まともに警察が取り合ってくれるかどうか。馬鹿にされるのがオチだ。（斎藤肇『思いがけないアンコール　新本格推理』）

(39) 文壇では、今いった日本的合理主義への反抗の役割は、自然主義がひと先

ずまともに果たしたのであった。　（河上徹太郎『日本のアウトサイダー』）

このように、「まともに」は否定辞「ない」を伴う明示的な否定文脈、否定的な意味を表す文脈、不定や肯定の文脈にわたって幅広く使用されている。「まともに」は明示的な否定文脈や否定的な意味を表す文脈で使用されることが多く、今回の調査では 364 例中の 266 例に上るが、不定や肯定など否定的とは言いにくい文脈で使用される場合も 98 例ある。「まともに」は否定極性を持つには至らず、述部の認め方は明確な極性を持たないということになる。

叙法については、以下(40)から(43)のように、「まともに」は命令、依頼、勧誘、意志などの「働きかける」叙法（工藤 2016:113）と共起することができる。

(40)　おれのいってることがわからねえのか!?英語ぐらいまともにしゃべってみろ。　（『週刊ポスト』2005 年 8 月 5 日号）

(41)　あなたはお子さんをちゃんとまともに育ててくださいね。（Yahoo!知恵袋）

(42)　小さな事からコツコツと、真面目にまともにやりまひょ、やね。　（Yahoo!ブログ）

(43)　おれだってまともにやろうとしたさ、アレックス。親父にならって、懸命に働いた。　（スティーヴ・ハミルトン著/越前敏弥訳『狩りの風よ吹け』）

以上、この節では、「まともに」は主に二つの意味を持つことを確認し、基準に関わる(32b)のような意味を表す場合の「まともに」の使用上の特徴について、共起先の述語の特徴、極性と叙法といった面から検討した。

4. 「満足に」と「まともに」の比較

第 2 節と第 3 節の検討から、「満足に」と(32b)の意味を表す場合の「まともに」は、意味的に主体の何らかの基準が関わっていること、主として動作性述語と共起すること、否定との親和性が高いことなど、共通するところが多いということが分かる。しかしながら、両者には相違点も少なく存在する。この節では、主にその相違に注目して「満足に」と「まともに」の異同を詳しく考察する。「まともに」に関しては、第 3.2 節と同様に前述した(32b)の意味を表す場合を扱う。

4.1 意味の比較

まず、「満足に」と「まともに」の意味について比較を行う。第2節と第3節で述べた「満足に」と「まともに」の意味を以下に再掲する。

(44) 「満足に」の意味
事態が、話者の望んでいる基準に達している (=(6))

(45) 「まともに」の意味
事態が、一般的に考えられている基準に達している (=(32b))

(44)と(45)から、「満足に」と「まともに」は意味的に共に主体の持つ何らかの基準が関わるが、「満足に」の場合、主体が持つ基準は主体が望んでいる内容であるのに対して、「まともに」の場合、主体の持つ基準は一般的に考えられている内容であり主体自らが事態を望んでいるかどうかはあまり関係しないという違いが伺える。

(46) そこでその家庭教師にも見切りをつけ、近所の評判のいい塾を聞きつけては説明を聞きに行きました。しかし、シビア―な私の質問や疑問に満足に答えてくれた塾は残念ながら一つもありませんでした。
（西口正『勉強の達人』）

(47) 2年ほど前に、職場に3年間うつ病で休職していた人がやってきました。（中略）毎日薬を飲んでいて、ボケーとしてばかりでまともに仕事をしていません。
（Yahoo!知恵袋）

(46)は話し手の質問に対してどこの塾も納得のいく答えを出せなかったという意味である。(47)はうつ病で休職した人が復職した後の仕事ぶりを述べる文である。(46)において塾の答えに対して話し手が主観的に満足していないを述べているが、(47)においては復職した人の仕事ぶりが一般的にそうあるべきと考えられているようになっていないということを述べている。(47)のような場合、話し手が満足でないということにつながるかもしれないが、「まともに」が中心的に表すのは事態のあり方が一般的に考えられている基準のようになっているかどうかということであり、主体が主観的にどのような状態にあるかということではない。

このように、主体の個人的な望みや期待が関わるかという主観性の度合において、「満足に」は事態が主体の望んでいるようにあるかということを表すので主観性の度合いがより高い。一方、「まともに」は事態が一般的にそうあるべきと考えられているようにあるかということを表し、主観性の度合いが相対的に低い。

4.2 用法の比較

続いて、「満足に」と「まともに」の使用上の特徴について比較する。第 2 節と第 3 節の考察結果に基づき、「満足に」と「まともに」の主な用法上の異同を表 6 にまとめた。

表 6　「満足に」と「まともに」の用法の異同

		満足に	まともに
共起先の述語	動詞	あり	あり
	形容詞「ない」	あり	ほぼなし
述部の認め方		否定極性を持つ	極性を持たない
叙法（命令・勧誘・意志など）		なし	あり

表 6 から、「満足に」と「まともに」は共に動詞述語と中心的に共起する点が共通していることが分かる。但し、動詞の語形に関して、「満足に」は、前述した表 2 のように可能形を取る場合が多い（総用例数の 7 割以上）が、「まともに」は動詞が可能形を取る場合もあるが、その用例数は全体の 1 割強しかない（364 例中 43 例）。また、非存在を表す形容詞「ない」との共起については、「満足に」は問題なく共起するが、「まともに」の場合はあまり共起しない（「休みがない」という出来事の非存在を表す 1 例のみ）。

なお、述部の認め方について、「満足に」は、第 2.2.2 節で見たように、不定や肯定の環境で使用される場合がわずかにあるが、否定的な環境で使用される場合が圧倒的に多い。「満足に」は（弱い）否定極性を持つといえる。これに対して、「まともに」は否定文でも肯定文でも使用され、明確な極性を持たない。叙法についても、「満足に」が命令・勧誘・意志などの働きかける叙法と共起する用例は今回の調査において

は現れなかった[10]。このことから、「満足に」はこれらの叙法と共起することが難しいと考えられる。一方、「まともに」は、前掲した(40)から(43)が示したように、これらの叙法と問題なく共起する。

また、表6にないが、極限を表すとりたて助詞などとの併用においても、「満足に」と「まともに」は異なる振る舞いを見せる。第 2.2.3 節で述べたように、「満足に」の場合、極限を表すとりたて助詞「も」「さえ」「すら」、及び「挨拶一つ」のような極限的な意味を持つ表現と共に使用されることが用例の半分以上に上る。「満足に」は話し手が発話された事態だけでなく他の事態についても不満を抱いているというような文脈で用いられやすい。一方、「まともに」はこのような文脈で使用されなくはないが、その用例が少ない（463 例中の 11 例）。

(48) だが長倉はただ本郷の部屋に暮らすだけで、なにも言わず頼らず、会話さえまともにしようとしなかった。（名倉和希『愛しい標的』）

(49) 客あしらいについて教えてもらうどころか、ビールの注ぎ方ひとつまともに教えてもらったわけではない。（柴田よしき『猫は聖夜に推理する』）

命令・勧誘・意志など事態の実現に向けて相手や話し手自身に働きかけるといった叙法との共起制限において見られる「満足に」と「まともに」の違いはそれぞれの意味における主観性の度合いに関係すると考えている。

第 4.1 節で意味の比較を行った際、「満足に」は「事態が主体の望んでいる基準に達している」ということを表し、事態が主体の望んでいるようにあるかどうかということがその意味を考える際に重要であると述べ、その意味に主体自身がどう感じるかが関わっているという点において「満足に」は主観性の度合いが高いと説明した。一方、「まともに」は「事態が一般的に考えられている基準に達している」ということを表し、事態が一般的にそうあるべきだと考えられているようにあるかどうかということがその意味にとって重要であり、よって、主体個人の考えというより一般的な社会通念が関わっているという点において「まともに」は主観性の度合いが相対的に低いと述べた。

この違いは「満足に」と「まともに」それぞれが持つ基準の了解可能性の違いにつながる。つまり、「満足に」の場合、基準は主体の考えや感情に関わり、どの程度動

[10] 筆者の内省でも「ご飯を満足に食べてください」という言い方はやはり不自然と判断する。

作を行えれば主体が満足に思われるかは了解されにくい。「満足に食べてください」と言われたら、聞き手はどのくらいの量を（或いはどのように）食べればよいか分からず戸惑うだろう。一方、「まともに」の場合、基準は社会で一般的考えられているもので、ある程度共有されているので了解されやすい。「まともに食べてください」と言われたら、一般的にそうあるべきと考えられているように食べることが要求されていると聞き手は理解される。例えば、体の機能を正常に維持することには一日 3 食を食べる必要があると一般的に考えられているという場合、一日 1 食しか食べていない人が「まともに食べてください」と言われたら、一日 3 食を食べることが求められているということが容易に分かるだろう。

このように、副詞的表現自体の意味にある基準が了解されやすく、具体的に事態をどの程度行えばよいかも相対的に想定しやすい場合、命令・勧誘・意志などの叙法と共起することも容易になる。命令・勧誘・意志などの働きかける叙法について、「満足に」が共起しにくく、「まともに」が共起しやすいのはそれぞれがもつ基準の性質によって説明できる。

5. まとめ

以上、本稿では「満足に」と「まともに」の意味と使用上の特徴を考察した。「満足に」は「事態が主体の望んでいる基準に達している」という意味を表し、「まともに」は「事態が一般的に考えられている基準に達している」という意味を表す。どちらの表現も事態と想定された基準との関係を表すという共通点があり、基準に対する達成を副詞的表現として捉えられる。一方、形容詞「ない」との共起、述部の極性や叙法など、実際の使用において「満足に」と「まともに」はそれぞれに異なる振る舞いを見せることも明らかになった。「ろくに」など他の基準に関わる副詞的表現との比較、副詞の表す意味との振る舞いの関係などは今後さらに検討する必要がある。

参考文献

工藤浩（2016）『副詞と文』ひつじ書房.

工藤真由美（1999）「否定と呼応する副詞をめぐって：実態調査から」『大阪大学文学部紀要』39. pp. 69-107.

高恩淑（2011）「現代日本語における可能表現の意味分類について：実現可能性の在り処を基準に」『京都大学言語学研究』30. pp. 51-70.

渋谷勝己（1993）『日本語可能表現の諸相と発展』『大阪大学文学部紀要』33（1）. pp. i-262.

尚暁歓（2023）「「ろくに」の意味と使用条件に関する考察」『筑波日本語研究』27.pp.50-66.

高見健一（2010）「否定極性への機能論的アプローチ」加藤泰彦等編『否定と言語理論』開拓社. pp. 357-377.

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版.

本多啓（2021）「可能表現と原因帰属」『神戸外大論叢』73（2）.pp.93-155

矢澤真人（2000）「副詞的修飾の諸相」仁田義雄等編（2000）『日本語の文法　文の骨格』岩波書店. pp. 187-233.

辞書

北原保雄編（2021）『明鏡国語辞典』（第三版）大修館

小学館国語辞典編集部（2002）『日本国語大辞典』（第二版）小学館

新村出編（2018）『広辞苑』（第七版）岩波書店

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂

飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂

松村明編（2019）『大辞林』（第四版）三省堂

山田忠雄等編（2020）『新明解国語辞典』（第八版）三省堂

用例出典

国立国語研究所：現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

https://chunagon.ninjal.ac.jp/

ショウ　ギョウカン／人文学学位プログラム

（2023 年 10 月 13 日受理）